HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	古屋安雄編中川秀恭先生八十五歳記念論文集「なぜキリスト教か」(創文社,1993年)
Author(s)	山崎, 保興
Citation	基督教学, 29, 41-46
Issue Date	1994-07-05
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46543
Type	other
File Information	29_41-46.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

古屋安雄編
中川秀恭先生八十五歳記念論文集
『なぜキリスト教か』

（創文社、一九九三年）

山﨑保興

本書は甚だユニークな論文集である。そもそもの由来については中川秀恭先生御自身の「謝辞」に詳しい。そもそも「なぜキリスト教か」という提題そのものが甚だ刺戟的である。今やそれは「全世界で問われている重大な問い」（古屋論文より）であり、大木英夫氏によれば、キリスト教史の第三期、即ち環大平洋地域の時代たる現代の問いなのである（古屋論文註9）。このような主題の下に、内容的には旧・新約聖書学、神学、教父学、宗教哲学、ギリシャ哲学、西洋古典学等、広汎旦多岐にわたってヴァライアティに富む諸論文を、全体を三部に分けて構成。第一部神学・キリスト教と諸宗教、の諸論文は何れもこの総主題にまともに取り組み、何れも素通りするには惜しい力作揃いであるが紙幅が限られているので割愛せざるを得ない。第二部聖書学には旧約関係二篇、新約関係七篇が並び、最後に「ケリュグマとレトリック――R・ブルトマン再考」土屋博、が置かれる。ここでも旧新両域における最新の研究動向を示す諸労作の紹介を断念して専ら本学会関係分のみに限定したい。

「マルコにおける「キリスト教」の枠」滝沢武人。滝沢氏と言えば「真珠の歌」を連想する懐しい時期があったが、その後の消息に疎い筆者には今日に至る足跡をフォローすることが出来ず残念である。ここでは「なぜキリスト教か」の主題にマルコ福音書のテキストを通して接近することが課題とされる。即ち福音書記者マルコが如何なる問題意識を以て彼の時代のキリスト教を理解していたのか、が問われるのであるが、全体として基本的にかつての田川健三氏の所説に準拠しているようである。田川氏によればマルコは正にペテロを中心とする十二弟子の権威を批判することを目的として福音書を書いているのであり、この「弟子批判」という動機によってエル

サレム教会の権威主義的閉鎖的な在り方を批判し、より解放的な積極性を主張したのである。滝澤氏は諸々の異論にも拘らず田川氏の見解を是とし、マルコの「弟子批判」を前提としつつ、形成途上の当時のキリスト教（会）が自ら作り出していった組織の「枠組」の問題に焦点を絞り、それに対してマルコがどのような意識と姿勢を有していたかを問おうとする。マルコは既に「キリスト教」の枠を突破し、人間がそのような枠の中に組み込まれて生きることを拒否し、そのような人間として生きたイエスの姿を具体的に描いた——。概ね田川説に同調しつつも随時独自の見解も挿入されるが、所論の背景に潜む例のガリラヤ対エルサレムの対立図式（それはイエス対サンヘドリン、マルコ対エルサレム教会、として二重に有効性をもつ）や、受難物語付録説等についても改めて見解を聞きたい。次に「ヨハネ福音書とエピクテートス『語録』の文体比較再考」佐々木啓。最近色々なかたちで提唱されている「文学批評」的研究の一つの試みとして、その昔E・C・コールウェルが提起した問題を現代的視点から再考しようとするものである。佐々木氏は近年久しくヨハネ福音書における繋辞の問題乃至は人称代名詞の問題に関心を集中して来た（就中エゴー・エイミについての考察は卓抜である）。ここでは題名の示すようにヨハネ福音書テキストと『語録』テキストとを、繋辞・接続詞・人称代名詞等について分析比較する。結論的にはコールウェルのように両者のギリシア語文体の類似性や同一性を単純に自明視するのは危険、とするのであるが、精密な言語学的分析の手法は、それを最も苦手とする者からすれば見事と言う外はない。今後いっそうの研究路線開発に期待しつつ、最後の土屋論文（前掲）に移りたい。

R・ブルトマンの「ケリュグマ神学」はかつて一世を風靡し、わが国においても「バルトの次はブルトマン」とばかり右を向いても左を向いてもブルトマンという一時期があった。それを知らねば話しにならぬ、という程度にしか知ることのなかった筆者であるが、近年その『神学論文集』（土屋氏訳）に触れ今またこの土屋論文によって改めて「ケリュグマ神学」成立の経緯を知ることが出来た。

注目すべきは、ブルトマンがケリュグマを強調するようになった背景には、元来彼が「語り――聴く」人間のあり方に強い関心を寄せていたという事実が存在したのではないか、との指摘である。そこから彼の「語られたもの（説教）」への関心の背景と彼自身の「語る」姿勢の有様（ありよう）が丹念に検討される。

ブルトマンの説教にはしばしば詩人の引用が見られる。正に耳から聴く音声に基づくそのつどの出来事を彼が重んじていたことの現われではないか。初期のブルトマンにおけるレトリックへの関心に注目する論者は、「ケリュグマ」が次第に神学的・教義学的に一人歩きするにつれて、ブルトマン自身においても神学的なケリュグマ自体が「決断」の対象となってゆき、そのため非キリスト教的なものを積極的に受けとめるレトリック的性格がそこから失われることになった、と指摘しながら、しかし彼の出発点における信念では、ケリュグマとレトリックが互いに生きた関係を保っていたはずであり、本来状況の中での瞬間的語りかけである聖書のテクストは、非キリスト教的文化のコンテクストの中でこそキリスト教的意味の場が探られねばならないことが、実は彼の本来こだわり続けるべき命題であったはずのものを、ブルトマン自身は遂にそれと正面から向き合うことはなったようである、と結ぶ。少壮新約学者から今やいつしか堂々たる宗教学者として立つ土屋氏が「神学ならぬ宗教学のとりくむはず」の課題として今後この問題についても更に展開されるであろうことを期待するものである。

第三部は「宗教哲学・宗教学」であるが、冒頭ほかならぬ中川秀恭先生御自身の「深き淵より」が掲げられ、以下九篇が納められている。中川論文は先年キリスト教文化学会（一九八七年十一月）において行われた講演に加筆されたものであるが、筆者もそこに参加していたし、昨秋北大での日本宗教学会（一九九三年九月）でも拝聴した。また本論文との関連において必然的に想起せざるを得ない「生と死の彼方へ」（『日本の神学』23日本基督教学会神学年報一九八四、『祈りと沈黙』創文社、一九八八年所収）についても、日本基督教学会（一九八三年九月）公開講演として拝聴したが、この時は筆者自身司会役をつとめ、また当番校責任者として諸般の配慮も行い、

弘前在任中の快事として忘れ難い。後者は自伝的要素を含み言わば先生の魂の遍歴の消息に触れることのできる、本論文理解にとっても欠かせぬものと思われる。そこにも記されているように哲学徒としての先生の出発点は「ハイデッガーにおける無の問題」であった。そしてまた新約学者としてのそれは「ヘブル人への手紙におけるキリスト論」――イェール大学学位論文（後に『ヘブル書研究』創文社、一九五七年、として公刊され、当時故山谷省吾先生より「学問の正道を堂々と行く勝れた作品」として称揚された）であるが、この間既に先生の研究路線においてハイデッガーとブルトマンが方法論的に結びついており、ヘブル書本文の文献批判的操作を通じ非神話化の方法を用いることによって、この手紙の著者がキリスト教以前のグノーシス的宗教思想とヘレニズム的ユダヤ教の地盤に根ざす諸々の概念や思想の型を用いて「キリストの出来事」の救済論的意味を開示しようとしたとの独自の作業仮説の証明を試みられた。先生のこの労作は、「イエス・キリストは私にとって何を意味するか」との問いに対してヘブル書の著者が何と答えるかを探ろうとしたものであり、「この問いこそは私の生存の根源にかかわるものであり、今日に至るもそれに対する答えが与えられたとは言い切れない」と述べられている。先生の研究と教育は常に無と死の問題に対面しつつ営まれて来たものであり、自らの存在を根底から脅かす問題――死の後に続く永遠の虚無に如何にして耐え得るか――を問い続けておられるのである。

ニーチェの言葉「神は死せり」はあまりにも有名であり、かつての大学紛争期にはわれわれの大学のチャペルの扉に、言葉の真意を毫も解せぬ学生たちによってそれがペンキで書きなぐられたりもした。「深き淵より」はそのものずばり「ニーチェの言葉『神は死せり』」と題するM・ハイデッガーの論考を手がかりに、「虚無」の問題を問おうとするものである。ハイデッガーはニーチェの『悦ばしき学知』第三書、断章一二五番「物狂いの人」における「神は死せり」という言葉の意味をニヒリズムの問題として注解した。物狂いの人は、昼間に提灯をつけて殺された神を探す。人間が神を殺せば自らの存在を支えていた基底が抜け落ち虚無の深淵が口を開く。「私は神を

探すのだ」という物狂いの人の叫びは、そのような虚無の深淵からの叫びであったに違いない。今日のわれわれの状況も、あの物狂いの人と変りはない。そしてこの状況はイエスの十字架上の死において原型的に示されている。「わが神、わが神、なんぞ我を見棄て給いし。」われわれも自己の底を破った所に口を開く虚無の深淵のただ中から叫ぶ。「ああ主よ、われ深き淵より汝を呼べり」と。われわれの耳は、深い沈黙のしじまの中から応える神の声を果して聞くことができるであろうか。「このような状況の中で、私は沈黙のうちに祈りつづける。私の祈りは、我信ず、信仰なき我を助け給え、に極まる。」(「生と死の彼方へ」)この論文を読む時われわれは一種の戦慄を覚える。いつしか日常性の覆いに隠されたわれわれ自身の深淵を一瞬覗き見るからである。今尚矍鑠(かくしゃく)として学者として大学人(管理責任者)として壮者を凌ぐ現役活動の唯中にありつつ、存在の奥深くあの根源的問いを問い続ける先生の姿に粛然と襟を正さざるを得ない。

最後は「合理的思惟と宗教——その相克と共存——」宇都宮輝夫、である。当初宇都宮氏がバルト神学に関する研究路線をわれわれの前に展開し始めた頃、少くとも筆者はその後の方向を充分には見定めることが出来なかった。「カール・バルトの宗教論」のあたりから少しく見当がつき始めたように思われる。その昔、一方でバルト旋風に吹き廻されながら、一方で形成期の岸本宗教学のしごきを受けて殆ど分裂症状に近い経験を持った者としては、バルトの宗教論が科学的宗教研究に対して持つ意義について冷静に検討し、その規範的性格の故にのみ排斥するのでなく、むしろそれを一つの思考モデルとして利用することの可能性を探ろうとする氏の姿勢には納得するものがあった。

本論文の論旨は極めて明快である。かつて科学的合理的思考によって乗り越えられ過去の遺物となるはずであった宗教が、現在人々の生活と意識の中に極めて根強く生き続けている現実をどう解くか、科学的合理性と宗教性、相互排除的関係にあるように見える二つのものが、現実には一方が他方を弱めることなく共存している事態をどのように理解すべきか、それがここでの課題である。宇都宮氏は諸説を点検しつつ最終的に通常「現実感覚」

と呼ばれるものの外に「可能感覚」とも言うべき別の経験様式を想定し、その中に宗教を位置づけようとする。この場合それは合理的思考の排除を意味しない。可能感覚の所有は現実感覚の欠落を意味しないからである。合理的に見れば消滅して行くはずの宗教的感覚が現実には如何にしぶとく根強いか、の具体的事例としてセブンスデー・アドベンティストの場合が上げられているのは興味深い。

ところで、本書を一貫して流れる通奏底音としての宗教的実存の問い（中川先生の根源的な問い）は、科学としての宗教学においてはどのように位置づけられるのであろうか。その昔岸本教授に対して発した単純素朴な問いを、ここにも残してこの稿を終りたい。